

30歳代半ばから後半のひきこもりの方における就労への思い**－居場所に通うひきこもりの方へのインタビュー調査－**

○ 岐阜経済大学 山田 武司 (会員番号 5075)

小木曾 隆臣 (大垣市社会福祉協議会・会員番号 8070)

キーワード3つ: ひきこもり 就労への思い 家族関係

1. 研究目的

各地域に子ども若者支援センターが設置されてきている。そして、家から出られるようになったひきこもりの方への社会参加への支援も、このセンターにおいて就労支援を中心に行われるようになってきた。しかし、家から出られるようになって、ひきこもりの方の就労への意識は複雑であり、「家から出られる＝就労支援」という構図はすぐには成り立たなくなってきたのではないかと考えられる。特に青年期をひきこもり、30歳代半ばから後半にいたる者においては、本人の思いもより複雑になってきていると考えられる。このようなことから、本研究では3人の家から出られるようになったひきこもりの方へのインタビュー調査を通して、就労に関する思いについて考察を行うことを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点は、研究の目的に述べたように家から出られるようになったひきこもりの方の、就労に関する内面に焦点を当てることである。そのため、インタビュー調査はリラックスした雰囲気で行えるよう、インタビュー協力者が通う居場所において行った。また、このインタビューは構造化をできるだけ避け、話しやすい居場所の話題から、過去から現在にいたる思いを自由に語ってもらった。そして、このインタビュー協力者の語りにコーディングを行い、就労に関わるカテゴリー（「就労に関する思い」「今後の思い」と、比較対象としての「家族関係」に関するカテゴリーを抜き出して考察を行った。

なお、本研究の協力者の概要は次の通りである。ただし、年齢はインタビュー当時のものを示す。Aさん：男性（34歳）、大学在学中からひきこもる。20代の後半の入院をきっかけに外に出られるようになる。Bさん：男性（36歳）、中学3年生の時にひきこもる。34歳頃にインターネットを通して知り合いができ、それがきっかけに外に出られるようになる。Cさん：女性（39歳）中学卒業直後にひきこもる。30歳のときに施設に通えるようになる。

3. 倫理的配慮

インタビュー調査においては、①インタビューの途中においてその中止など、インタビューを拒否する権利を持つこと、②インタビュー内容の取り扱いにおいては、個人が特定できるような分析・考察は行わないことなどをインタビュー協力者に説明し、文書により

調査参加の同意を得た。

4. 研究結果

A:【家族関係】家族とは子どものころから全然話をしない。どうするのか分からない。家の中では家庭内別居みたいで、食事も別に食べる。普通じゃない。【就労に関する思い】もうすぐ親も定年なので経済的なことも考えるし、余計どうしたらいいのかという焦りもある。何か形だけでも儲けにならなくても何か金が動く、誰かに与えて報酬が返ってくるという形だけでもないと、それは何かをやっていることにはならない。中間段階の場所があれば、それだったらなんとかできる。【今後の思い】社会の中で役割を持って胸を張ってというか、自分も誰かに求められるような存在でないと、とにかく劣等感しかない。病院は働くための道筋がない。作業所とかも行き止まりの感じ。それより人間関係をいっぱいつくって、コネクションの関係の中で何かやった方がいい。

B:【家族関係】外に出ることや就労に関して家族と触らずにきた。表面上うまく家族の中でやっていけている。家族とはそんなに口をきかないわけではないが、そのことに触れるとギクシャクする。【就労に関する思い】就労するための場所に行くのが怖い。自分の中に今まで実績みたいなものがない。自分を受け入れてくれる場がなさそう。そこまで行くのが無理、怖い。【今後の思い】年齢もいくとやれることが限られる。何か習得しようとしても難しそう。若いときはそれなりにあせっていたが、発展的な感じや希望的なものがない。

C:【家族関係】親に甘えて、家事を手伝ってあげているという思いがあった。30歳を過ぎた頃、母親の具合が悪くなり家のことをいろいろやっているうちに、これがあたりまえだと気づき、今までの自分を恥ずかしく思った。それまでは母親の愚痴を聞いてお世話をしているつもりだったが、愚痴を聞くのもあまりしなくなった。【就労に関する思い】就労への意欲はすごく低い。自信が全然ない。自立＝悪いことと感じる。【今後の思い】興味がるイベントのボランティアをやりたい。ありのままいき、できる部分をはっきりさせて、その部分をしっかりお手伝いする。

5. 考察

①Aの家族関係は機能不全が継続しており、就労への思いは、親の定年に対して、コネクションでの仕事を求めるなど劣等感の中で焦りを表している。②Bは支えがない表面的な家族関係の中で、就労への思いは、自身の実績のなさから恐怖とあきらめを表している。それに対して、③Cは家族関係に新たな役割をもち、比較的安定した関係の中で自己洞察を深め、自信が持てない就労ではなく、できる範囲でのボランティア活動を求めている。以上のことから、「焦り」「恐怖」「あきらめ」を支え軽減する家族関係に代わる人間関係や社会的役割の支援、就労だけではなく多様な社会参加の保障が必要であると考えられる。なお、本研究は3人の方からのみの調査であり、調査対象者の拡大が今後の課題でもある。